

## 素晴らしきハワイ諸島のウミガメたち—驚異的な回復を遂げた40年

### Magnificent Marine Turtles of the Hawaiian Islands : An Amazing 40-Year Rise to Abundance

ジョージ・バラズ氏  
George Balazs

1943年米国生まれ。米国海洋漁業局太平洋漁業研究センターの研究員として、40年以上にわたり、ハワイ諸島におけるアオウミガメの研究・保全・環境教育を牽引。1978年に米国で絶滅危惧種に指定されたハワイのアオウミガメを復活させ、2011年に絶滅危惧の指定解除に導いた功績により、全米野生生物連盟自然保護特別功労賞(2004年)、国際ウミガメ学会特別功労賞(2012年)を受賞。ウミガメ研究の世界的第一人者として、国際ウミガメ学会理事、国際自然保護連合ウミガメ専門委員会副議長(オセアニア地域担当)、Marine Turtle Newsletter 編集委員なども務める。来日多数。日本やアジアの文化・民俗にも造詣が深い。



数百万年にわたって適応し、現代まで生き延びてきた爬虫類の子孫として、7種のウミガメが世界に生息している。人類はその歴史の中でカメと様々な関係を持ってきたが、中でも沿岸部や島しょ部の人々とウミガメは密接に関わりあってきた。具体的には食糧、探索およびナビゲーション能力、貿易品、神へのお供え物、ペット、実用的な道具、装飾品、薬、副葬品、占いなどに使用されたように、文化的、伝統的に同時代を生きる人類の生活に深く織り込まれてきた。

今日、ウミガメ類7種のうち、アオウミガメ *Chelonia mydas* のハワイ諸島個体群を除くすべてが国際自然保護連合(IUCN)によって絶滅危惧種に指定されている。2012年にハワイのアオウミガメは、IUCNのウミガメ専門委員会による総合的評価を受けて(<http://www.iucnredlist.org/details/16285718/0>参照)、IUCNで定められた保全状況のうち、絶滅のおそれが最も低いカテゴリーにあたる軽度懸念(Least Concern)へと絶滅危険度の指標が下げられた。過去40年以上にわたってハワイのアオウミガメは、その個体数の増加に伴って新たな行動や適応を見せ、生息域を拡大させてきた。これらの好ましい変化には、陸地でのバスキング(甲羅干し)、ハワイの主な島々での産卵、水中でのクリーニング場所の形成、沿岸浅海域における日中の摂餌、人間の生活圏近くへの来遊や人に対する許容度、新たな植生の摂餌、水中での休憩場所として水路や川の利用などの、頻度や程度の増加などが含まれる。将来的には、海面上昇や気候変動に適応した産卵や何百万年もの間ずっと回復力を持ち続けるといったような、さらなる良い変化や順応が期待される。

ハワイの他にも、いくつかのウミガメ個体群において、漁業効率の向上と本来のカメの生息域への人間の侵入とそれに起因とした乱獲から、めざましい回復を示しつつある。しかし同時に、個体数が減少し続け深刻な低水準にある個体群も少なくない。このようにウミガメの保全状況における相違があるなか、ウミガメの適切な保護と持続可能な利用のバランスを保つのは今の私たちに与えられた大きな課題のひとつであり、ウミガメの捕獲を含めた利用は、ウミガメと人間の両方にとって好都合となるかもしれない。

全てのウミガメ類の生活史の保全上の長所と短所としては、繁殖のために大回遊を行うこと、優れたナビゲーション能力があること、砂中に産卵するために砂浜にやってくること、孵化した幼体が外洋域で生活するために岸から遠く離れた海域へと移動すること、地域によっては相対的に緩やかな成長を示し、それに伴って性成熟も遅れることなどが挙げられる。

advantageous to both turtles and people.

Conservation strengths and weaknesses of the life history of all sea turtles include: migrations over great distances to breed; keen navigational abilities; coming ashore to lay eggs in the sand; newly hatched young that travel far from shore to live on the high seas; and in some areas relatively slow rates of growth causing delayed adult sexual maturity.

Successful conservation programs that endure are best built with local communities as their foundation. National legislation and international conventions, based on sound ecological principles, clearly also have importance. However, strategies for conservation are made robust and equitable when they integrate cultural and traditional components forged at the local level by the very people closest to the turtles and their environment. Japan and all of East Asia have vigorous and growing sea turtle conservation programs that deserve praise, support, and partnership to improve the status of regional stocks. The natural direction toward which we should be moving regarding sea turtles, as eloquently expressed by the Sea Turtle Association of Japan, is "to bring back rich and plentiful nature that allows and tolerates a diversity of values and world views."

In light of their 40-year rise to abundance, green turtles in the Hawaiian Islands constitute a unique experimental model to comprehensively understand the dynamics of a recovering sea turtles population. In addition, conservation and management practices in Hawaii, founded upon four decades of research results, can serve as a real-life learning ground for people in East Asia and other regions striving to save and sustain their own charismatic and culturally important sea turtles resources.

## ハワイのアオウミガメ個体群の 絶滅危惧種指定解除の持つ意義

Great significance of delisting the Hawaiian green turtle from the  
threatened species list under the U.S. Endangered Species Act

岡本 慶 (水産総合研究センター国際水産資源研究所)

本大会に招聘したジョージ・バラズ氏は、1970年代にハワイ諸島でウミガメの調査を開始して以来、40年以上にわたり、ハワイ諸島をはじめ中部太平洋に浮かぶ島々におけるアオウミガメを中心としたウミガメ類の生態解明やその保全、教育啓発に貢献してこられた。その成果は、米国絶滅危惧種保護法(U.S. Endangered Species Act)<sup>\*)</sup>により1978年に絶滅危惧種に指定されて以来、実に34年ぶりにアオウミガメのハワイ諸島個体群は、その指定を外されるといふ形で実を結ぶことになる。ここでは、氏が主体的にかかわることで成し遂げてきた、アオウミガメのハワイ諸島個体群の回復とその絶滅危惧種の指定解除といふことの持つ意義について紹介したい。

アオウミガメは世界の大洋に広く分布し、熱帯から亜熱帯にかけての海域に主要な産卵場が存在している。ハワイ諸島北西部に位置し、複数の島々からなるFrench Frigate Shoals(フレンチフリゲート礁)もその一つである。このFrench Frigate ShoalsではEast Islandにて1973年から産卵回数のカウントをはじめとする調査が開始されて以来、毎年信頼の置けるデータが蓄積され続けている。そのように長期にわたって産卵回数のモニタリングがなされているのは、世界

すぐれた保全プログラムは、地域社会を基盤として構築される。また、理にかなった生態学的原則に基づいた国内規制や国際条約も非常に重要である。しかし保全戦略は、それらが、ウミガメやその生息域のごく近くで暮らす人々によって、地域レベルで構築された文化や伝統などの構成要素を含む時に、丈夫で公平なものになる。日本とその他全ての東アジアには、そこに生息する地域個体群をよりよい状態にするための、協力関係や支援、賞賛を受けるに値する、活気にあふれたウミガメ保全プログラムがあり、さらなる成長を続けている。ウミガメに関して我々が本来目指すべき方向というのは、日本ウミガメ協議会によって雄弁に語られているように、「多様な価値観や世界観を許容する豊かな自然を取り戻すこと」である。

40年間の個体数の回復を踏まえると、ハワイ諸島のアオウミガメは、回復中のウミガメの個体群の動態を包括的に理解するうえで類のない実験モデルである。さらに、ハワイにおける40年間にわたる調査・研究の成果を基にした保全・管理の実践的な活動は、カリスマ性があり文化的にも重要なウミガメ資源を守り、絶やさないための努力している東アジアその他の地域の人々にとって、実例を学ぶ場としての役割を果たすであろう。

(翻訳:岡本慶・通訳:小松聖児)

Seven species of ocean turtles exist globally as the descendants of ancient and resilient reptilian lineages that have adapted and survived for millions of years. Over the course of human history an array of relationships have developed with turtles, and especially marine turtles amongst coastal and island peoples. Turtles are woven deeply into the cultural, traditional and contemporary fabric of humanity, with uses ranging from: food for families; hunting and navigational skills, objects of commerce; sacrifices to the Gods; pets; utilitarian implements; ornamentation; medicine; funerary; foretelling the future; and spiritual strength and protection.

Today all seven species of marine turtles are considered endangered by the International Union for Conservation of Nature (IUCN), with the exception of the population of green sea turtles (*Chelonia mydas*) in the Hawaiian Islands. In 2012 Hawaii's green turtles were downlisted to IUCN's category of Least Concern following a comprehensive assessment by the IUCN Marine Turtle Specialist Group (see <http://www.iucnredlist.org/details/16285718/0>). Over the past 40 years Hawaii's green turtles have exhibited new behaviors and adaptations along with their increasing population and expansion into new habitats. These favorable changes have included: significant increases in terrestrial basking; nesting in the Main Hawaiian Islands; formation of underwater cleaning stations; daytime foraging in shallow water near shore; close co-existence with and tolerance of people; feeding on new types of vegetation; and the use of streams and rivers for underwater resting. Even more beneficial changes and acclimations can be expected in the future, including shifts in nesting to adapt to climate change and sea level rise, as sea turtles have successfully done with resiliency for millions of years.

Several other sea turtle populations besides Hawaii are also showing remarkable restoration from over-exploitation due to efficient fishing technologies and human encroachment into previously pristine turtle habitats. At the same time there are many sea turtle stocks at seriously low levels that continue to decline. This dichotomy in sea turtle conservation status is one of the great challenges of our time in balancing appropriate protective measures along with limited sustainable use, where such harvest and other forms of human utilization might be

でもごく限られた場所だけであり、非常に貴重な記録である。

さて、バラズ氏による講演の主題はハワイ諸島のアオウミガメとその個体数回復についてである。まず基本として、アオウミガメに限らず、全てのウミガメ類は生活史の大半を海洋で過ごすために生息数を知ることが難しく、基本的に産卵のために砂浜に上陸したメスや産卵巣の数を、個体数の増減を測る指標としていることを初めに断っておく。

ハワイ諸島のアオウミガメは1800年代中頃から1960年代初頭にかけて、肉や卵を取るために彼らの摂餌域や産卵地で乱獲され続けたことによって絶滅の危機にさらされていた(Amerson, 1971; Balazs, 1976; 1980)。そのような危機に立ち向かったのが、バラズ氏であった。氏がハワイで活動を始めた当初、East Islandでのアオウミガメの年間産卵回数100回を下回る程度であった(Chaloupka and Balazs, 2007)。それが長年にわたり乱獲され続けてきた影響によるものであることは明らかであった。バラズ氏はEast Islandで産卵回数の記録を取りながら、同時に乱獲を止めるためのキャンペーン活動も始めた。すると1978年にESAの下で絶滅危急種に指定されたことも追い風となり、驚異的な回復を見せることとなる。その割合は1970年以降、年間5.7%と推定され(Chaloupka and Balazs, 2007)、これは2004年時点で、乱獲以前の推定生息数32万個体の約83%に当たる26万5600個体まで回復したことを意味する(Balazs, 1976; 1980; Chaloupka and Balazs, 2007)。さらに、データが不十分とする意見はあるものの(Snover, 2008)、ハワイ諸島のいくつかの生息域では環境収容力の上限に達したとする推定もあるほどであり(Chaloupka and Balazs, 2007; Wabnitz et al., 2010)、East Islandでの年間産卵回数も500回を超えるまでに増加した(Chaloupka and Balazs, 2007)。

このような経緯からアオウミガメのハワイ諸島個体群はウミガメ類で唯一、ESAの絶滅危急種指定を外れることとなったのであるが、これは本当に驚異的なことである。というのも、1973年にESAが施行されて以来、個体数の回復により、絶滅危惧種あるいは絶滅危急種の指定を外れるに至った例は、ハクトウワシやハイロオオカミなど32集団(ESAの定義の下では種)に過ぎず、そのうち海棲動物ではコクジラの東部北太平洋個体群、トドの東部個体群の2集団(種)しか例がないのである。現在ESAにおいて2196\*もの集団(種)が絶滅危惧種あるいは絶滅危急種とされていることから考えれば、その指定解除がいかによろしいことであるかがよくわかる。

このESAにおいて、絶滅危惧種あるいは絶滅危急種に指定される際、ある種の生物学的情報や脅威の程度に基づいて以下の5つの要因による影響の程度が評価される。1) 種およびその生息域の破壊、2) 商業、娯楽、科学、教育目的での乱獲、3) 疾病や捕食、4) 既存の保護の不十分さ、5) その他、種の存続に影響を及ぼす自然もしくは人工の要因、である。そして、逆にそれらの指定の解除においても、指定するときと同様、上記の5つの要因について精査されるのである。この評価により、個体群サイズおよび傾向、生息域の質的、量的な安定性に基づいて、脅威が取り除かれたもしくはコントロール下にあることを示す必要がある。このようなことを証明するのは、ウミガメのような長寿の動物においては至難の業である。ハワイのアオウミガメは約30年で性的に成熟するとされているが(Zug et al., 2002)、個体群の回復について確実に論じるには少なくとも30年の継続的な調査が必要ということになる。ジョージ・バラズ氏は、そのような長期にわたりハワイのアオウミガメについて調査、研究し、それらを基に保全や普及啓発にも寄与し、その回復を演出し、見届けたのである。

\*1 米国絶滅危惧種保護法(U.S. Endangered Species Act: ESA)

絶滅のおそれのある種を保護し、それらの種とそれらを取り巻く生態系を保全することを目的として1973年に制定された。米国魚類野生生物局、米国商務省の海洋大気圏局が管理しており、前者は陸生および淡水生物について、後者はクジラなどの海棲生物やサケなどの遡河回遊魚についてそれぞれ責任を負っている。ESAの下で、種は絶滅の危険度に応じて、絶滅危惧種(Endangered)もしくは絶滅危急種(Threatened)のいずれかに区分される。絶滅危惧種は、そのすべて、または大部分が絶滅の危機に瀕しているものが該当し、絶滅危急種は、近い将来、絶滅危惧種になる可能性が高いものが該当する。なお、害虫を除く全ての動植物が指定の対象とされている。また、ESAの定義において、種には亜種、品種に加え、脊椎動物においては個体群も含まれる。

\*2 2014年10月17日現在

## 2014年 日本のウミガメ資料

### Lists of contributors to SEA TURTLE DATA IN 2014

#### 2014年 産卵に関して調査をされた方々

アイランドトリップ、アカウミガメを守る会、あかばね塾、秋元真彦、阿久根市、朝生哲、浅香新八郎、浅川弘、阿南市、阿部直樹、小豆野次則、東寺市、奄美海洋生物研究会、奄美市、奄美野生生物保護センター、有田辰美、荒田利光、有川衛、衣斐継一、池村茂、石井雅之、石川由樹、石畑光紀、石原孝、伊仙町、西表の海亀を守る会、石垣島ウミガメ研究会、いちき串木野市、市田裕太、一宮ウミガメを見守る会otahime、いであ、伊東嘉宏、伊藤幸太郎、井上尚志、指宿市、今岡成組、岩切康二、岩崎眞、岩城正夫、岩本俊孝、内田明紀、内田桂、馬塚丈司、海ガメお助け隊、ウミガメと里海を守る会、海の中道海洋生態科学館、梅田美緒、ウラシマ・プロ、衣斐継一、エビとカニの水族館、えらぶ年寄り組、追中大作、大洗水族館、大磯町郷土資料館、大分うみがめネットワーク、大岩保雄、大川内広樹、大木清、大崎町、大園隆仁、太田早智、大田広幸、大野裕、大野隆、大梅謙治、大牟田一美、岡垣ウミガメ倶楽部、岡田幸生、興克樹、興津武秀、沖縄美ら海水族館、沖永良部島ウミガメネットワーク、小倉明、小田幸宏、御前崎市ウミガメ保護監視委員会、御宿ウミガメ連絡会、恩納読谷ウミガメ調査隊、海原明子、カイフネイチャーネットワーク、甲斐靖朗、甲斐康大、鹿児島大学ウミガメ研究会、加島祐二、片山渉、包国浩哉、鹿屋市、上村哲規、亀田和成、カメハメハ王国、亀人会、鶴川市、鶴川シーワールド、嘉陽宗幸、唐津の海を守ろう市民の会、川上孝子、河内洋子、河津勲、川辺愛敏、環境省自然公園指導員、紀伊半島ウミガメ情報交換会、菊川章、菊池ひとみ、岸田賢吾、北水慶一、紀宝町ウミガメ公園、紀宝町ウミガメ保護監視員、肝付町、鏡江町、樹下町浩二、串間研之、串間市、串本海中公園センター、九十九里浜の自然を守る会、国直集落、久保井有代、熊沢佳範、熊野の自然を考える会、久米満晴、黒木秀一、黒木豊、黒澤喜紀、黒潮町、黒島研究所、小石尚眞、小出祥太郎、合田昌平、香南市、神戸市立須磨浜水族園、郡健一郎、越野慶太、越本知大、児玉嘉嗣、児玉達三、後藤武志、後藤清、後藤利幸、古根村幸恵、小林清重、小林淳一、小林茂夫、米須邦雄、齋藤純康、坂元育男、阪本登、笹川二成、薩摩川内市、薩摩川内市下飯支所、佐野真奈美、サンクチュアリNPO、座間味ウミガメ会、鮫島安代、山王洋介、静岡・海辺づくりの会、静岡県、自然の宝箱ふくつの会ウミガメ特捜隊、6DORSALS KAYAK SERVICES、篠原秀作、品田裕輔、志布志市、志布志湾大黒イルカランド、しまね海洋館、志摩自然保護官事務所、志摩半島野生動物研究会、下田海中水族館、下野明文、新江ノ島水族館、新宮市海ガメを保護する会、新宮市王子ヶ浜を守る会、隈元正敬、関希美、関口謙治、瀬戸内町、瀬堀真紀、泉南市、外村浩幸、タートルクルー、平治隆、高梨利夫、高橋健太、高野竜一、武田明美、竹田洋志、龍郷町、田中智啓、田中宇輝、田名瀬英朋、榎橋コズエ、田上徹、谷崎樹生、田端重夫、玉の浦リップスクラブ、垂水市、知覧町ウミガメ保護研究会、鶴田祐土、鶴野雄司、堂園力郎、土岐尚義、徳永幸太郎、徳之島町、徳嶺耀子、百々治、豊田史弥、豊橋市、渡連キャンプ場、出口智久、中尾文宏、中川道生、中島洋雄、長島町、中種子町、長田かおり、長友宏子、中富譲治、中林朗、中村トモコ、中村修、中村豊、中山徹、成ヶ島を美しくする会、成瀬裕昭、西明美、西真弘、西奈美、西邦雄、西田伸、西之表市、西山繁美、西山桂一、日南市野生動物研究会、沼津市、野崎清志、根井武俊、延岡市教育委員会、萩野進也、横田涼、長谷勝之、長谷川奈緒、花尻薫、花野晃一、濱川孝久、濱田暎聖、濱田幸、濱野兼吉、浜臨幸一、林政孝、林裕美子、浜松市、原田英祐、春田清信、春野の自然を守る会、日在一和泉浦の海を育みウミガメを守る会、日置市、東篤志、東申良町、彦坂真、日向市アカウミガメ研究会、平井厚志、平内光弘、廣達也、広沢俊昭、日和佐うみがめ博物館カレッタ、ふくしま海洋科学館、福津市、藤田健一郎、吉田琴、藤本彩乃、古中隆弘、ペイン留美、真栄田ウミガメプロジェクト、前田修大、前田皓明、枕崎市、増田洋志、増山涼子、松井翼、松崎文好、松武結生、真澄克昭、丸山晃、満有治、三浦修、三重大学かめっぶり、水田好彦、水野廣次郎、満洲寺三、道の島公社、みどりの地球大好き会、湊久和、みなべウミガメ研究班、青年クラブみなべ、南あわじ市、南伊豆町、南大瀬町、南九州市、南さつま市、南種子町、南地吉郎、南知多ビーチランド、横崎久郎、三宅島自然ふれあいセンター、三宅島ネイチャーツアー-mahan、宮口光敏、宮崎光一、宮崎県教育庁、宮崎野生動物研究会、宮里俊輔、宮原孝雄、宮地勝美、宮平聖秀、向井公紀、村岡実、室戸市立元小学校、モラスコむぎ、森野淳、森本貴子、森谷香取、屋久島うみがめ館、屋久島町、ヤ・シー、保田昌宏、山下憲一、山下美香、山下芳也、山下竜二、山田真太郎、大和村、山本明男、山本繁幸、山本達哉、山本宏幸、吉崎和美、吉田徹、吉田嘉苗、吉田徹、(株)ヨロン島、与論町、琉球大学ちゅらゲームー、漁師NPO、若林郁夫、渡辺紗綾、渡辺美佳、渡辺幸久、綿野好則、渡部明美、渡部千尋(50音順、敬称略)

# 奄美大島砂浜地図



- 未調査浜
- 市町村調査浜



- 1 カワチハマ
- 2 ムチハマ
- 3 ケドミ
- 4 美久3
- 5 美久2
- 6 美久1

- 1 ナタンマ
- 2 イケジナガハマ
- 3 クンマ
- 4 額阿室北
- 5 額阿室
- 6 コンマ

10km

# 知られざる奄美群島の歴史と文化

## History of Amamioshima

世界自然遺産登録に向けた取り組みが進められている奄美群島であるが、自然以外にも、特徴ある歴史・文化が存在する。ところが、日本の小中学校で使われている教科書には、奄美群島の自然・歴史・文化について、まだ何も記載が認められない。教科書に何も記載されていない現状は、特に歴史分野では、地方史にすぎない奄美の歴史は重要ではないと誤解されてしまう場合が少なくない。しかし、最近の研究の趨勢としては、むしろ日本歴史を理解する上で、奄美群島史は「欠かせない」地域史であり、きちんと把握するべきと認識され、注目されはじめています。

奄美群島史の特徴を簡潔に指摘するならば、①複雑な行政統治、②伸び縮みする国家境界、③最北の亜熱帯島嶼における交易史の3点があげられる。その複雑な行政統治の歴史が、奄美群島に独特の文化の醸成をもたらしてきたのである。これらの特徴をふまえながら、奄美群島史(薩南諸島史、南西諸島史を含む)の要約と文化を紹介する。

### 1 旧石器時代

奄美群島にはいつから人が暮らしていたのか、定番の関心事である。約26,000～29,000年前に噴火、降灰したと考えられる「始良Tn火山灰」が喜子川遺跡(奄美市笠利町)、ガラ竿遺跡(伊仙町)で確認されていて、その堆積層の下層から遺跡が確認されているので、既に旧石器時代には、奄美群島で人が暮らしていた事実が解る。当該時期は、最終氷期に当たり、海面は現在よりも100m以上低下して、既に南西諸島は分断されて島嶼化していた。旧石器時代人は、有視界航行で島嶼間移動してきたと考えられるが、旧石器の形態から、九州系石器説と台湾系石器説の対極の理解論が示されていて、南西諸島の初期人類の系譜はまだ明らかではない。

### 2 縄文時代

縄文文化は、沖縄本島まで波及が認められるが、先島諸島では、縄文文化とは異なる南方的文化が営まれていた。奄美群島は、基本的に九州の縄文文化の影響を強く受けている。奄美群島では、約7,000年～6,000年前のイヤンヤ洞穴遺跡、喜子川遺跡(奄美市笠利町)、中甫洞穴遺跡(知名町)等が確認されているが、地球規模で最も温暖化、海面上昇がピークに達した時期に当たり、その海面上昇は「縄文海進」と呼ばれている。この時期に形成された古砂丘列から、縄文時代の遺跡が多数確認されている。現在のサンゴ礁が発達した海岸地形は、まだ形成されていないが、生業はやはり漁労採集活動が中心である。大型哺乳類のリュウキュウイノシシや大型爬虫類のウミガメが、植物食・魚貝類と並んで、重要な食料資源として捕食されてきた。約4,000年前から竪穴住居の集落形成が活発化しはじめ、特に約3,000年以降は、ハンタ遺跡(喜界町)、国指定史跡「宇宿貝塚」(奄美市笠利町)、城サモト遺跡(奄美市住用町)、塔原遺跡(天城町)、国指定史跡「住吉貝塚」(知名町)、上城遺跡(与論町)等の集落遺跡が奄美群島全域から確認されるようになり、大型石皿や磨製石斧、骨角器や貝製品等が発達した独特の縄文文化が繁栄した。

### 3 弥生時代並行期～古墳時代並行期

日本歴史が農耕社会から政治的社会に転換していく弥生時代から古墳時代、南西諸島には弥生文化も古墳文化も定着せず、異なる歴史を歩みはじめていく。しかし、奄美群島や沖縄諸島は、弥生文化・古墳文化と交流が断絶していたわけではない。弥生時代・古墳時代の政治的社会における有力階層が使用していた装身具は、ゴホウラ・イモガイ等の奄美群島以南に生息する南海産大型巻貝類を素材としたものが中心であり、これらの素材供給地として九州と遠隔地交易が活発に行われていた。奄美群島史の特徴である「最北の亜熱帯島嶼における交易史」が、当該段階から開始されるのである。

奄美群島に農耕社会が形成されるのは、11世紀代である。奄美群島では、弥生時代以降、長期間にわたり漁労採集活動が生業の中心を占めていた。しかし、少なくとも7世紀以降には、鉄器が普及しはじめていて、農耕を行わない成



熟した漁労採集社会が発達していたと考えられている。サンゴ礁と海岸砂丘が発達した現在の海岸地形は、弥生時代から古墳時代にかけて形成されたもので、多数の貝塚遺跡が確認されている。サンゴ礁に適応した漁労活動が発達して、成体にならないアオウミガメ(体長50cm前後)も、食用として大量捕獲されている(図1)。

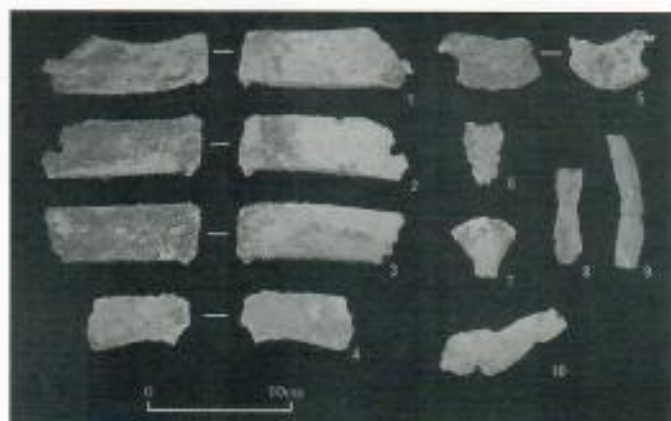


図1 小湊フワガネク遺跡から出土したウミガメ科の骨(奄美市教育委員会, 2013「国指定史跡 小湊フワガネク遺跡 遺跡周辺の自然環境」)

#### 4 古代～中世

7世紀に古代国家(律令国家)が成立すると、列島周縁の「蝦夷」<sup>えみ</sup>「隼人」<sup>はやと</sup>まで地方統治政策が強力に展開される中で、南西諸島は「化外(国家の統治の及ばない地域)」<sup>けがい</sup>として位置づけられ、「南島」と呼ばれる異域<sup>おんとう</sup>として認識されていた。『日本書紀』『続日本紀』の記事から、古代国家と南西諸島は、奄美大島を拠点としながら朝貢を行う緩やかな政治的関係が維持されていたと理解されている。大宰府政庁跡からは、奄美群島から運び出された貢納品に付けられたと思われる奈良時代の荷札木簡が出土していて、奄美大島・沖永良部島の島名が確認されている。

その後、11世紀から13世紀頃には、南西諸島は「南島」から「キカイガシマ」として認識されるようになる。その頃の国土領域の地理的認識は、東縁が「ソトガハマ」(青森県津軽半島東部)、西縁が「キカイガシマ」(鹿児島県薩南諸島)として理解されていた。特に「キカイガシマ」は、薩摩硫黄島を中心とする火薬原料(宋の軍事兵器用)の硫黄交易、喜界島を中心する<sup>くら</sup>螺鈿原料の夜光貝交易等、日宋貿易に欠かせない重要地域として機能していたと考えられている。世界遺産「平泉の文化遺産」<sup>ひらい</sup>における12世紀建立の中尊寺金色堂で用いられている数千個といわれる夜光貝も、奄美群島北半から運び出された可能性が高い(図2)。鎌倉時代には、地理的認識がさらに精密となり、薩南諸島は「口五島」<sup>くごとう</sup>「奥七島」から成る「十二島」と「外五島」(奄美群島)として認識されるようになる。ここに中世国家の国土領域は、最大面積に達するところとなる。



図2 ヤコウガイ貝殻の集積遺構(奄美市教育委員会, 2012「国指定史跡 小湊フワガネク遺跡 解説資料」)



## 5 琉球国統治時代

15世紀初頭、沖縄本島に「琉球国」が成立する。南西諸島で、「日本」と「琉球」の二つの国家がせめぎあう関係が発生したのである。琉球国は、1450年、1466年、1537年、1571年等に奄美群島に軍事侵襲して、おおむね15世紀中頃には奄美群島を統治下に編入したと考えられている。中世国家の国土領域は、琉球国の奄美群島侵襲によりふたたび後退するのである。

琉球国の奄美群島支配統治により、琉球国の行政機構が奄美群島にも適用されるようになる。現在の地方自治体に相当する「間切」と呼ばれる行政単位が導入され、奄美大島7間切(笠利・古見・名瀬・住用・屋喜内・東・西)、喜界島5間切(志戸桶・東・西目・湾・荒木)、徳之島3間切(東・面縄・西目)に区分された。沖永良部島・与論島は、薩摩藩統治時代には、沖永良部島3間切(木根留・大城・徳時)、与論島2間切(東・西)が確認できるが、琉球国統治時代まで遡るものなのか明らかではない。行政統治する役人と同時に、重要な職務を与えられていたのが、ノロとよばれる神女たちである。ノロの祭祀組織は、各集落単位で構成されていたが、それらのノロを統括する「大あむ」等と呼ばれる管理職のノロが各島に配置されていた。そうしたノロ祭祀の神女(神役)が、奄美大島・加計呂麻島の各集落には、数は激減しているが、まだ現存している。

## 6 薩摩藩統治時代

江戸時代になると、琉球国と交易を続けてきた(世界遺産「石見銀山」産出銀は、琉球国を經由してマラッカ王国等の東南アジアで海外と交易)薩摩藩が、1609年に琉球国へ軍事侵襲して、異国である琉球国を支配統治下に置く重大事件が発生する。琉球国は、実質的には近世国家(幕藩体制)に編成されるところとなる。しかし、薩摩藩は、琉球国を支配統治下に置きながら、公的には独立国家として存続させて、琉球国から薩摩藩に割譲された奄美群島も、公的には琉球国の所領としてそのまま位置づけていた。これは、対外関係上、琉球国を「装う」ための措置である。薩摩藩による奄美群島の統治体制が整備されていく過程で、奄美群島は、琉球国とは異なる近世国家の体制に直接的に編入されていくのである。

薩摩藩は、米による税収確保のため、奄美群島の農業振興に積極的に取り組んだが、1747(延享4)年の「換糖上納令」(米を黒糖に換算して税として納める)を契機として、稲作からサトウキビ栽培への転換が進行した。さらに1830(文政13)年の「惣買入制」(生産した黒糖すべてを藩が買い入れする制度)が開始されると、サトウキビ栽培のプランテーション化は、奄美群島全域で著しく進行したのである。明治維新を主導した「薩長土肥」の中でも、薩摩藩が果たした役割は際立つものがある。その薩摩藩財政で、奄美群島で生産された黒糖が果たした役割の大きさは、確認しておかなければならない。

## 7 近代～現代

明治政府は、1871(明治4)年に「廃藩置県」を施行するが、これに伴い琉球国は、1872(明治5)年に「琉球藩」となる。以後、1879(明治12)年に「沖縄県」になるまでの過程は「琉球処分」と呼ばれているが、公的に琉球国として扱われていた奄美群島は、明治時代に鹿児島県に編入されているが、決して無関係ではない。明治時代に移行しても、砂糖利権については、基本的に薩摩藩統治時代と変わらず鹿児島県により独占されていた。

黒糖をめぐる農民苦難の時代は、戦後になるまで続くのであるが、一方で、明治時代は、大島紬、カツオ漁、林業、百合根等のサトウキビ栽培以外の新しい産業が成長した時期でもある。亜熱帯の自然環境に適応して、芭蕉布や大島紬等の染織文化が発達、特に大島紬は、奄美大島の基幹産業として繁栄してきた(昭和50年代前半以降、衰退を続けている)。

今日、自然保護の観点等から難しい局面を迎えているが、奄美大島・徳之島・加計呂麻島では、林業も戦後まで隆盛をきわめていた伝統的産業である。隆起サンゴ礁で森林がない喜界島・沖永良部島・与論島に対して、亜熱帯多雨林の照葉樹林で覆われている奄美大島・徳之島は、琉球国統治時代から造船業が重要な位置を占めていたが、建築業

独自の発達を遂げてきた。特に、幕末以降、<sup>カド</sup>楔を使用して釘を使わず組み立てる現代のプレハブ住宅に通じる民家建築技術が確立、奄美群島全域に普及した。大会会場に隣接する奄美市立奄美博物館の敷地内にも、伝統的古民家と高倉が移築されている(民家・高倉は見学無料)。奄美空港に近い宇宿集落には、国指定重要建造物「泉家住宅」がある。

1923(大正12)年、瀬戸内町古仁屋に陸軍要塞司令部が設置されたのを嚆矢として、奄美大島・加計呂麻島に挟まれた大島海峡には軍事施設が整備され、太平洋戦争開戦に向けて軍事拠点化していく。太平洋戦争終末期、米軍は「アイスバーグ作戦」と命名した南西諸島攻略作戦を4月から6月に展開、沖縄本島に55万人の米軍兵士が上陸、日本軍11万人が迎撃したが(9万人が戦死)、住民も10万人以上が死亡したといわれる国内唯一にして最大の激戦地と化したのである。

敗戦後、種子島・屋久島の南側となる北緯30度以南の南西諸島は、米軍の占領統治下に置かれることになる。ここから8年間にわたる「米軍占領統治時代」が始まるのである。この時、日本の国土領域は、大きく縮んだことになる。その後、1951(昭和26)年にトカラ列島が日本に返還され、続いて本土在住の出身者の方を含め奄美群島の住民が総力を結集、祖国復帰運動に取り組んだ結果、1953(昭和28)年に奄美群島が日本に返還される。そして1972(昭和47)年、北緯24度以北の島々、沖縄県が日本に返還されるのである。現在の日本の国土領域の範囲は、こうした南西諸島の島嶼の日本返還の歴史を経て確定されたものなのである。

奄美群島の日本復帰後、1954(昭和29)年に制定された「奄美群島復興特別措置法」(現在は「奄美群島振興開発特別措置法」)に基づいて復興事業が進められていく。奄美群島だけで許可されている「黒糖焼酎」の生産も、そうした事業の一環として、日本復帰直後に開始されたものである。国内限定地域生産の黒糖焼酎を、この機会にぜひご賞味いただきたい。サトウキビ農業も、現在でも盛んに行われていて(原料糖用)、高品質の黒砂糖も生産されている。

以上、南西諸島の日本行政分離から、国土領域は、一度定められたら変わらない不動不変のものでは決してなく、政治的な事情により伸縮する事実を学ぶことができる。また奄美群島史の通史から、琉球国統治時代、薩摩藩統治時代、米軍占領統治時代と、外部の政治的権力による支配統治が何度も繰り返されている事実にあらためて気づかされる。奄美群島は、日本でも非常に特殊な歴史を持つ地域であることを確認しておきたい。

日本歴史の時代区分

旧石器時代	縄文時代					弥生時代				古墳時代		飛鳥時代	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	安土・桃山時代	江戸時代	明治時代	大正時代	昭和時代	平成時代
	早期	中期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期													

奄美群島史の時代区分(高松隆)

旧石器時代	縄文時代					弥生時代	古墳時代	飛鳥・奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町・安土・桃山時代	琉球国統治時代	薩摩藩統治時代	明治時代	大正時代	昭和時代	米軍占領統治時代	昭和時代	平成時代
	前期	中期	後期	前期	後期														

奄美群島史の時代区分

旧石器時代	縄文時代										古墳時代	飛鳥・奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町・安土・桃山時代	琉球国統治時代	薩摩藩統治時代	明治時代	大正時代	昭和時代	米軍占領統治時代	昭和時代	平成時代
	I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V													

図3 各地方の時代区分表

奄美群島の文化は、そうした複雑な行政統治の歴史の過程で醸成されてきたものである。琉球国統治時代に琉球文化の影響を受けた後、薩摩藩統治時代に鹿児島文化の影響も強く受けながら育まれてきたのである。日本にはない豚を食べる食文化があり、豚脂も盛んに利用されてきた。保存食である豚肉の塩漬けも「塩豚」と呼ばれ、伝統的料理に欠かせない食材である。今日親しまれている「鶏飯」「油そうめん」も、そうした歴史的環境から生まれてきた伝統的料理なのである。

奄美群島では、現在でも旧暦が日常生活で使用されていて、伝統的行事は旧暦の日取りで行われている。旧暦八月には、喜界島・奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島で、「アラセツ」「シバサシ」「ドンガ」と呼ばれる夏正月とも指摘される重要な豊年祭が行われ、伝統的芸能の「八月踊り」（徳之島は「夏目踊り」「七月踊り」）が全集落で一斉に行われている。これらの島嶼には、裏声を多用する「シマウタ」と呼ばれる独特の民謡もある。「琉球音階」の境界は奄美群島にあり、徳之島以北の島嶼は律音階の音楽文化圏であるが、沖永良部島・与論島は琉球音階の音楽文化圏である事実も注意しなければならない。

奄美群島の歴史と文化を理解しようとする時、この「複雑な行政統治」の歴史の実態をきちんと把握する努力が必要になる。

奄美市立奄美博物館 学芸員 高梨 修



A large, light gray, stylized globe is the central focus. It has white outlines of continents and oceans. At the top, a black sea turtle is shown swimming. Below it, a smaller, smiling sea turtle is visible. At the bottom, several small white fish are swimming. The word 'index' is written in black, lowercase letters, with each letter inside a small black circle, arranged in an arc across the top of the globe.

i n d e x

02 … 歓迎のごあいさつ 奄美市長 朝山毅

03 … ごあいさつ 日本ウミガメ協議会会長 松沢慶将

04 … 知られざる奄美群島の歴史と文化 奄美市立奄美博物館 学芸員 高梨修

09 … 奄美大島の自然とウミガメ保全活動 奄美海洋生物研究会 興克樹

15 … 素晴らしいハワイ諸島のウミガメたち—驚異的な回復を遂げた40年— ジョージ・バラーズ

19 … 2014年 日本のウミガメ資料

21 … 2014年 日本のウミガメの上陸・産卵状況

27 … ウミガメ類の漂着状況報告2014

30 … ウミガメ類の混獲状況報告2014

32 … 加藤弘さんを偲んで

57 … シンポジウム講演要旨

63 … 口頭発表講演要旨

72 … ポスター発表講演要旨

83 … 日程

25th

# Japanese Sea Turtle Symposium

in AMAMIOSHIMA



第25回日本ウミガメ会議 in 奄美大島

日本ウミガメ誌 2014